

「地域と学校の新しいカンケイ」～WIN WIN より Happy Happy～

【3月21日放送内容】

DJ：さて、昨年の4月からお送りしてきましたこのコーナー「地域と学校の新しいカンケイ～Win Win より Happy Happy～」が、今回が最終回ということで、社会教育課長の松田さんとコミュニティ・スクールディレクターの増田さんに「社会教育課のコミュニティ・スクールの取り組み」についてお話をお伺いします。お二方よろしくお願いします。

松田・増田：よろしくお願いします。

DJ：さて、まずは松田さん。尼崎市では、コミュニティ・スクールに2年前からモデル校で取り組んでこられたとお聞きしています。尼崎市教育委員会は、なぜ、コミュニティ・スクールを導入しようと考えられたんですか。

松田：はい。学校ってみなさんにとって身近な場所でしょうか。大人になってしまうとお子さんが通っている方でなければ、なかなか、入りにくい場所かなと思います。

DJ：そうですね。用事がなければ入ったら悪いような感じがちょっとありますよね。

松田：そうですね。学校も地域の方々と良い関係でいたいと思っています。でも、どうやってとなると結構難しいんです。学校は、子どもたちが勉強したり、友だちと一緒に過ごしたりして成長するところですが、今の世の中って変化が目まぐるしくて、勉強しないといけないことも多岐に渡っています。先生も次々、新しいこと教えていかないといけないし、特に今はコロナの問題もあって、さまざまな対策を考えたり、一人ひとりの子どもたちを丁寧に見守ったり、本当に大忙しなんです。

DJ：そうですね。先生の「働き方改革」が必要だって言われてますもんね。

松田：そうなんです。先生方が忙しいのはもちろん、最近は、インターネットの普及などでスピーディで世界中と簡単につながれて、便利なこともたくさんありますが、変化も目まぐるしく、これからの世の中に巣立っていく子どもたちをどんな風に育てていくかは、大人たちが総がかりで考えなくてはならないことになってきました。コミュニティ・スクールは、地域の方々に委員になっていただき、学校と地域が力を合わせて学校運営に取り組む『地域とともにある学校』づくりのための制度なんです。文部科学省は、コミュニティ・スクールの設置を全国の教育委員会に呼びかけているんです。

DJ：そうですね。では、コミュニティ・スクールを導入することでどのようなメリットが考えられますか。

松田：コミュニティ・スクールには、学校運営協議会という話し合いの場を作ります。委員は、校長先生や教頭先生、先生方のほか、地域の方や保護者の方の中から校長先生が推薦した方になっていただきます。学校運営協議会で学校のことをお互いにしっかり話し合えるのでこれがよいところです。

増田：学校には、保護者や地域の方から様々なご意見やご提案が寄せられます。今まで学校は、全ての課題を学校だけで解決しようとしていました。しかし、学校だけで解決できる問題はそんなに多くありま

せん。学校や子どもたちの課題を学校だけで抱え込んでしまうのではなく、保護者や地域住民、多様な関係者ととも「一つのテーブルにつくこと」で、新しいアイデアや考え方が生まれ、今後の方針を決めることができます。学校運営協議会は、このテーブルになれるんです。

D J：教育委員会の方針として「Win Win より Happy Happy」を打ち出されていますが、コミュニティ・スクールを導入することで学校、地域、保護者がどのように Happy Happy になれるですか。

増田：私は日頃、コミュニティ・スクール導入校をサポートしていて、学校も地域も Happy Happy になってほしいと思ってきました。そこで、コミュニティ・スクールにすると、どんな Happy があるかなと考えたとき、学校には3つの Happy があると考えました。一つ目は「先生だけではできない子どもの成長に関わる活動について、地域が様々な支援をできる」、二つ目は「授業内容や学習環境がより豊かになったり、一人ひとりの子どもに多面的な支援を行える」、三つ目は「地域の理解、協力によって先生が子どもと向き合う時間が増える」です。また、地域の Happy としては、一つ目は「地域住民が、意欲と関心を持って自ら進んで学校支援活動に参加することができる」、二つ目は「これまで地域の方が培ってきた経験を生かす場所が広がり、自己実現や生きがいにつながります」、三つ目は「地域住民が学校で活動することで、地域の教育力の向上につながり、学校を拠点とした地域の活性化が図られる」ということです。また、保護者にも Happy はあります。一つ目は「地域の中で子どもが育てられているという安心感が生まれます」、二つ目は「保護者同士や地域の人々との人間関係が深まる」と思います。Win Win は、経済用語として使われていますが、教育やボランティアで「勝ち負け」とか「損得」というものがしっくりこないなと思っていました。やっぱり、みなさんに Happy になってもらいたいですよね。

D J：うん。やっぱりそうですね。コミュニティ・スクールは、子どもたち、先生、地域、保護者のみなさんが Happy になれる取組みなんですね。

松田：そうですね。Happy が溢れるようにしたいです。実は、尼崎市はコミュニティ・スクールを導入する前から学校支援のボランティアさんがつながる Happy 応援ネット（地域学校協働本部）を全ての小学校に設置してきました。Happy 応援ネットでは、1校に1人ずつ地域の方がコーディネーターとしていらっしゃいます。1校に1人ずついらっしゃる市は珍しいようで、それに加え、今は各地域の地域課に小学校区担当の職員がいるので地域課とも連携がしやすくなっています。そういう面で尼崎市は、コミュニティ・スクールを導入するのに他市と比べて大いなる強みを持っていると言えるんです。

D J：では、モデル校では順調に進んできたということでしょうか。

松田：はい。モデル校は現在8校ありますが、どの学校も校長先生の熱い思いがあります。それに、地域の方、保護者の方がしっかりと支えてくださっているなと感じています。最初、モデル校を募集したとき、何校応募いただけるのか少し不安でしたが、5校からお申し出がありました。やはり今の時代、地域と学校の連携が必要だと、校長先生は感じていらっしゃるんだなと思いました。

増田：申し出のあった学校には、社会教育課が出向いて校長先生、教頭先生と、今後の進め方などについて打合せを行います。その後、その学校の先生方に説明し、運営協議会の委員候補の方にも委員の役割について説明します。

DJ：はい。実際に先生方や地域の方の反応は増田さん、いかがでしたか。

増田：はい。これから始まる新しい取り組みに期待を感じておられましたが、同時に不安も感じられておられました。説明の最後に、「モデル校としての実施なので、学校の特色や状況に応じた形で、少しずつ進めていただけたらいいですよ。」や「難しく考えることなんてないんですよ。まず、小さなことから始めませんか！」と伝えて説明会を終わりました。

DJ：そうだったんですね。やっぱり新しいことを始めるのはなかなか勇気がいりますもんね。これまで取り組んでこられて、今後の課題などは、松田さんありますか。

松田：はい。モデル校の校長先生方からも「もっとこうしたい」というお声をいただいております。コロナ禍で学校の活動も制約される中、思うように進められなかったこともあります。学校運営協議会の委員の方々から『学校の運営に関するご意見を』と求められても、なかなか言えないよね」ともおっしゃっています。でも、普段の学校の様子を見ていただく機会は確実に増えていて「今の学校ってこんな感じなんですね」とおっしゃられて、タブレットを使った授業など熱心にご覧いただいております。

DJ：そうなんですね。では、今コミュニティ・スクールは松田さん、8校とのことですが、これからどのように進めていこうとお考えですか。

松田：まず、これまで導入実績のある小学校41校を先駆けに、順次、中学校、高等学校と拡大し、令和7年度を目途に尼崎市立学校全校に導入したいと思っています。

DJ：おお！それは、実現できそうですか。

松田：簡単なことではないと思いますが「地域とともにある学校づくり」は、コミュニティ・スクールの設置だけではなく、必ず、進めていかなければならないことだと思います。

増田：コミュニティ・スクールや地域学校協働活動を導入することが最終目的ではなくて「どのような子どもを育てていくのか」を全ての関係者でビジョンを共有すること、地域と学校が連携・協働して創り上げていくプロセスがとっても大切です。

松田：みんながHappy Happyな関係になっていくようにしたいですね。

増田：Happy Happyは、地域と学校の新しいカンケイでもありますし、どんな関係であっても、そうあってほしいと願っています。

DJ：はい。この1年いろいろとお話をお伺いしてきましたけども、尼崎市のコミュニティ・スクールが今後もますます発展されることを願っています。今回は、松田さんと増田さんにお話をお伺いしました。お二方、どうもありがとうございました。

松田・増田：ありがとうございました。